



第111号
 発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会長 義男
 編集人 岡部 義長
 編集委員 川博
 印刷所 須坂新聞社

特集 第七回研究発表会・第六回女教師研究大会
 60.11.30 60.11.16

自らを耕しつづけて

感銘深い研修・実践発表

十一月三十日(土)須坂小学校視聴覚室において、会員百三十余名の参加をえて、第七回研究発表会が開催された。この研究発表会は、今回で七回目を数え、一段と広く会員の研究・実践の発表の場として発展してきた。本年も四名の先生により、日頃の実践・研修の成果の発表がなされた。

また、十一月十六日(土)には、女子会員等百余名の参加をえて、会員のすばらしい作品が展示された須坂小学校視聴覚室を会場にして、第六回女教師研究大会が開催された。

各学校での保健室での実践の中から、過半数の会員の参加をえて、午後一時三十分開会された。二学期の行事も一段落といふ当日、初冬の陽さしの差し込む会場に、多くの会員の参加をえて、午後一時三十分開会された。二学期の行事も一段落といふ当日、初冬の陽さしの差し込む会場に、多くの会員の参加をえて、午後一時三十分開会された。

一人二十分の持ち時間での四人の先生方の日頃の実践・研修の成果の発表を聞き、深い感銘を受けた。

最初は「保健室の実践から」と題して、田幸ひと美先生(仁礼小)の発表があった。

三番目には、「Aさんと私」と題して、柳初美先生(小山小)の三年間にわたる、Aさんへの生活指導の実践が発表された。児童への直接指導はもとより、両親の考え方の変

容をも導びきながらとりくまれた実践は参会者に感動を与えた。

最後に「能(謡曲)における神仏の役割」と題して、宮前日王先生(日野小)から発表があり、能(謡曲)に表現されている人生の落ち着き先―地獄・極楽。能における信濃などについて研究の成果を発表された。

教育実践の中から
 A子と私

柳 初美

Aさんは六年生、私の組の男の子である。出会いは約三年前の四年生の四月、担任となった時である。その年の十一月、彼は気になる行動をした。それをきっかけに、環境を知らべた結果、家族のつながりや物の見方考え方において、心の通い合いや暖かさに欠けていることがわかってきたのである。

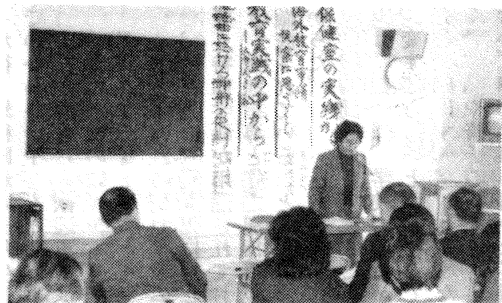
そこで、Aさんへの取り組みとして、一つ目に下校後の生活を工夫改善すること、二つ目に担任が夕方Aさんに電話をかけること、三つ目に担任とAさんの家族全員で、一か月を振り返って毎月それを記録して、それを翌月の生活設計に役立てること、という方法でやってみることにした。

それらの方法を現在まで継続してきた結果、Aさんの言動にも家族の意識にも少しずつではあるが、向上の兆しが見られるようになってきた。その事についておおよその経過を記してみたいと思う。

Aさんの父母は共働きである。だから、Aさんは放課後になると血のつながりはないが面倒をみてくれるおじいちゃんの家へ帰って行く。家族や本人の話によると、生まれこのかた、一か月二万円の保育料でお願いいちゃんに育てられてきたというから十年目ということになる。その間、おやつも本もこづかいもおじいちゃんまかせであったといふことがわかった。父も母もそれぞれの仕事において立派な業績をあげている陰に、子どもは他人まかせにされて犠牲になっていたのである。

ここに、彼が気になる行動をした要因があると考えられた。

そこで、気になる行動から一か月後の十二月、あまり乗り気でない両親を説得して、下校後、Aさんを自宅で過ごさせる生活に切り変えてもらうことにした。このことで両親は、下校後のAさんが無事に家で過ごせるような心づかいと工夫をしなければならなくなつた。今まで、親としての責任を回避してきた親にとっては、大変苦痛なことであ



ったようである。しかし、今までの育て方に強い反省を示したのも事実であった。

さて、今度は、自宅で下校後を過ごしているAさんを担任としてどう支えたものか、と考えて、毎日夕方電話をかける方法をとることにした。

担任がしゃべり、それに短くAさんが答えるだけの味気ない淡々としたやりとりが何か月も続き、なかなか進展が見せない方法にあせりを感じたが、ここが我慢と耐えてかけ続けた電話であった。数か月後から、Aさん自身が自宅での過ごし方に目処がついてきたようので、電話で話す内容も積極的かつ具体的となり、いつの間にかしゃべる主体が彼に移行していった。そして、五年生の時の九月三十日、とうとう彼の方から初めての電話をかけてきた。電話をかけた日を含め、電話をかけた回数が増え、電話をかける回数が増えた。

しかし、彼の積極性に反比例するように、こちらからの電話回数は減らし、彼にも回数制限をさせることにした。いつか、私との電話から自立させなければならぬと思つたからである。

一方、一か月をふり返ってまとめると、家族の記録の方であるが、半年近くは白紙のまま記録用紙を戻してきた父親もいろいろと心づかいを示すようになり、最近では紙面いっぱいAさんに対する父親とし

アメリカ合衆国を視察して

徳 永 隆 俊

(小山小)

ての姿勢を記すようになった。また、Aさんの扱ひ方も心もつかめず反抗される現実を、十年以上も他人まかせに育ててきたバツと受けとめた母親は、自分自身がずくを出したより、結びつきを深めていることが記録から伺われるこの頃である。

うな気がします。アメリカ視察といっても広大な国のためそのごく一部を視察したにすぎませんが、すばらしい環境の中で一クラス二十〜三十人といった少人数の児童一人一人に行き届いた教育の姿を見て、本当にうらやましく思いました。それと同時に、改めて外国における日本の立場やあるべき姿がわかったような気がしました。

九月十日、東京発午後三時五十分、NW機で一路シカゴへ。日本(須坂)を出発して二十五時間余り。ジョプリンまでの道のりは本当に長かった。カンザスステイからフリーウェイをバスに乗ること三時間。夕闇迫る大平原を延々とひた走り続ける時、広大というか膨大な合衆国に圧倒されてしまった。いつしか夜のとばりもおりて、ようやく町らしい明るさが見えてきた時には本当にほっとした思

今、静かに振り返ってみると本当に長く、また、あっといふ間に過ぎた十六日間でした。その間、いろいろな人と出会い、語り、何か見方や考え方が前よりも広がったよ



海外旅行が初めての私は、何もかも新しい経験、試行錯誤の連続で食事や習慣等の面で戸惑いも多かったが、メニューの読み方など、わからない時は思いきって片言でたずねたりしているうちに意味が通じる時もあり、意志が通じた時は本当にうれしかった。ジョプリンでの最初の訪問校は、九月三日に新学期が始まり、新しくできたばかりのセシル・フロイド小学校で、幼稚園と一年生から五年生までの教室を参観した。どのクラスも三十人以下で先生を中心に静かな雰囲気での学習をしていた。給食は、体育館兼食堂の大きな部屋で、私たちが子どもたちと食べ、昼休みには、校庭でしばし話したり、遊んだりした。海外視察で、やはりほっとするのは、子どもたちと一緒にいる時である。子どもたちに囲まれて一斉に何か問いかげられる。手振り身振りを交え、片言の英語で会話をかわす。何とか意味が通じるものである。サインをしたり、してもらったり、なわとびなどして本当に楽しい一時だった。

ニューヨークからTW機で五時間余り乗り、最後の学校訪問地であるエルカフォンに着いた。最初の訪問校は小高い丘の上にあるビスタ・グラウンデ小学校。校長先生に案内されて、全校児童と向き合いアメリカ国旗と州旗の掲揚が行われた。アメリカ合衆国が一つの国として団結し、自由と正義を尊ぶことを全員で誓

った後、幼稚園から五年生までのかわいい子どもたちの歌によるすばらしい歓迎を受けた。この学校のスペシャルプログラムは、リースとギブレットとよばれるプログラムで、障害児にも優秀児に対しても特殊学級が用意されており、個別指導と能力別指導が徹底されていることがよくわかった。

学校訪問を通して感じたことは、第一に、学校の環境が大変すばらしいということである。床はすべて、じゅうたんで、机や椅子の物音さえしない。静かな落ち着いた雰囲気であるということ。校舎周辺も緑に囲まれて、芝生の手入れも行き届いている。二番目は、州によってある程度、自由な教育方針の下に行われているため、ずいぶん教育の方法が多様であったこと。三番目は、小学校では、男の先生が数えるぐらいいなかったこと。四番目は、個別指導と能力別指導が徹底されていたこと等である。

今回の視察を通して、さまざまな人たちとの出会いを体験した。会話では苦労したけれど、コミュニケーションで大事なことは、発音の上手へたではなく、心を開いて接すれば片言の英語でも通じるものである。

最後に、意義ある視察ができたことを関係者の皆様に感謝し、貴重な体験で学び得たことを今後にかかしていきたいと思います。

(栗ガ丘小)

研究発表会に参加して

木下 息

中島厚子

燕登山の下見の折に合戦小屋の管理人さんと話す機会があり、高山病の話から過呼吸候群の話になった。「燕ぐらゐの登山で、高山病になることはまずない。そのような症状を訴える人の大半は過呼吸候群である。ビニール袋一枚で簡単になおせる。」こんなことが記憶にあったため、仁礼小の田幸先生の研究発表は興味深く聞かせていただいた。

昨年、今年と研究発表を拝聴する機会を得、日常の多忙さに埋没せず、脈々と研究実践に精励されている先生方に感動し、頭が下がる。

栗ガ丘小、徳永先生の、「アメリカ合衆国を視察して」では、スライドと合わせアメリカの教育が詳しく発表され、生徒数二十四、五人、業間が四分など驚くことが多かった。ジョプリン教育長の「合衆国は自由な国ですから僕は個人、家庭に任せてある。そして学校では他人の場所を尊重する権利を教えている。」という言葉が興味深かった。単に、国がちがいで、片付けられる問題ではないような気がした。

大変興味深い研究発表が多く今後の参考にしていきたい。(常盤中)



(森上小)

保健室の実践から

田幸ひと美

過呼吸症候群—この病気が最近注目されているもので、各学校でもたくさんさんの症例がでてくるようです。原因は、心因性で起こるものがほとんどです。

本校でも、今年三年生の女子にありました。

九月二十五日(木) 給食の時に、S子さんの席の近くにいた友人がひそひそ話をしているのを見て、自分の悪口を言われていると思ひ込み、最初は、下を向いて泣くのをこらえていました。そのうちにヒックヒックとしゃくりあげるようになり、先生や友人が、心配して理由を聞いても答えない状態がしばらく続きました。突然、喉が痛いと

言い、「う」とつまるような声を出し始めたので、保健室に付き添われてきました。ベツトでは上半身を起こして、最初は喉を手で押さえて苦しそうな声をあげていました。

すぐにお家の人に来ていただき主治医の先生に診ていただきました。医師は、聴診をしたり、血圧を測ったりした後、ビニール袋をとりだし、S子さんの頭にかぶせて、ゆっくり呼吸をするように指示し、しばらくして頭から袋をとりはずしました。それを三、三回繰り返すうちにしだいに呼吸が落ち着いて来ました。

医師は、「過呼吸症候群で

すね。原因は心因性です。」と言われさらに「癖になりま

すから注意してください。」と付け加えられました。

S子さんは、もうすっかりよくなり、いつもと変わりなくにこにこしていました。

なぜ、S子さんに本症候群が発病してしまったのか考えてみますと、やはり、昨年の十一月に、お母さんが病気のため亡くなってしまったことが一番の誘因となっていると思います。

家庭状況は、父と兄、祖母と暮らしています。小さな部落に住んでいるので、近所のお年寄りに、いろいろ聞かれるようです。そのたびに、淋しく、つらい気持ちにさせられていたようです。

性格は、根気強く、最後まで丁寧な仕事に取り組んでいますが、内向的な性格で、発表の時の声も小さいですが、小さいながらも頑張って発表しようという意欲はみられます。それからS子さんは、将来は必ず学校の先生になると心の中でお母さんに誓っているとても芯の強い子でもあります。

三年生というまだまだ幼い時期に母親を亡してしまったS子さんを、家庭や学校で、暖かく見守ってあげることが何よりも大切だと思います。

その他、頭痛や腹痛、気分

が悪いといった訴えで、たびたび保健室を訪れる児童について問診を繰り返していると思わぬ精神的な問題を発見することがあります。

一例をあげますと、昨年の九月頃、二年生の男子が、よく頭痛や腹痛を訴えて保健室に訪れました。家庭では父母、祖父母、弟がいます。父親が川崎に転勤になり離れているので淋しく、精神的に不安定になってしまったようです。

朝も登校するのをいやがり母親が毎朝、学校へ連れて来ました。

また、行動面でも落ち着きがなくてよくけがをしたり、ちよつとしたことで、友人とけんかになってかみつくとい

う衝動的な行為がありました。この児童については、担任の先生から早い時期に相談がありましたので、保健室ではよく話を聞いてやり、また少しぐらいの頭痛の時は教室へ行くよう励ましました。

また、廊下で会った時は、



できるだけこちらから声をかけるようにしました。しばらくして、担任の先生から、朝は一人でも登校できるようにになったというお話があり、頭痛や腹痛で保健室に訪れることは、ほとんどなくなりしました。

しかし、まだ行動面で落ちつきがないことなど見られますので今後も暖かい目で観察

女教師委員会で学んだこと

中島 絹代

春、委嘱状が届き、間もなく第一回委員会。バリバリの先生方にまじり、とぼとぼとした自分を感じました。

今年度、「人間性豊かな児童・生徒を育てるために、私たちはどのように研修したらよいか」子どもの見とりを通して「のテーマで研究を進めて来ました。まず、見と

りというところは、子どもの立場がわかり、子どもと創り出す授業を願って行うもので、今までのとらえを反省、修正しつつ行うものであることを確認しました。

七月には、ある委員の先生の授業参観を皆でし、対象児を中心とした見とりについて研究会を持ちました。又、夏休みには、委員各自が見とった学級の対象児に関する資料を基に、教育研究所の加藤先生よりご指導を受けました。その中、心に残ったこととして、対象児だけ見とるのでなく、仲間や教師との関わりで

していく必要があります。子供は、自己の心理状態をうまく言葉で表現できないから、それを身体的症状で表現するという特性を持ってきます。そういう子供を担任の先生と協力して、早く発見して、暖かい人間の中で、子供を励ましていくことが保健室の大切な役割だと思っております。(仁礼小)

見ること、見とりのやり直しをする(こと)事例を解釈し、指導の仮説を持ち、新しい事実を確認する、これを繰り返す(こと)の二つがあります。

私は、知恵遅れで情緒不安定な面を持つB君についての事例とその読みとりを資料として持参しましたが、先生は又違った読みとりをされました。中でも、「B君の問題行動に対し、中島先生は自分で解決しようとしすぎます。も

つと子どもをじつと見るように。」の一言が、胸に突き刺さりました。思うに、これから長い間、B君と共に歩むのは学級の仲間達なのだと思

って痛感したわけなのです。そこで、取り上げた事例を自分なりに再び読みとり直し、指導の手だてを考え、実践してみました。そのいくつかと経過を述べたいと思います。

△子どもどうしのトラブルを子どもらに解決させようと

を察する仲間も出て来て、B君にとっては、自分をわかってくれる仲間の存在を実感する場も多くなりました。又私自身は、今まで、B君の行為の結果のみから様々な判断を下していたことを、改めて深く反省させられました。

△B君の努力する姿を認め励ます学級作りをしようとした。この夏の水泳学習が一つの大きなきっかけとなりました。泳ぎの苦手なB君でしたが、自ら五十及び百メートルへと挑戦しようとする姿に学級の仲間が心を動かされ、泳ぎ方やターン等教え始めました。その心が一人、又一人と学級中に広がり、ものすごい応援のうちに完全に完泳できました。私は、B君の努力と共に、それを支えた仲間を心からほめました。以来、B君に対する仲間の関わりが又一つ深まったように思われます。

その他、△生活グループの編成のやり直し、△学習中の個人指導の充実、△B君の力で判断し実行できる役割分担等に配慮してきました。

そして、次の二点を心にとめて、今後もやっていきたいと思っております。●その子の力から、何をどの程度育てるのかを明確にして援助し、満足できる場面を多くすること。

●仲間が自分なりに努力する姿を素直に認め、共に喜び、助け励まし合える学級作り

力を注ぐこと。

心して歩みたい。(小山小)

教職二十年目

斉藤章子

「やめたくなくなったらいっつもやめればいいや」と、何の気負いもなく、楽しんで教師をやってきて、まもなく二十年が過ぎようとしている。

三人の子を育て、教師・妻母親の三役をこなしながらの生活は、確かに大変な時期もあった。でも、その時々に出会った先輩や仲間の先生方、学級の子どもや父兄に、育てられ支えられてここまでやってこられたのだと、最近、しみじみとありがたく思う。

「新卒の地」

木島平中部小学校。初めて先生とよばれた学校である。最初の一月、よく泣いた。純朴だが、自己をストレートにぶつけてくる一見粗野な山の子どもたちを、教室にとじこめて、自分のへたな授業や話に集中させようと、まったく一方的にむきになっていた。だから何をやってもうまくいかなかった。そのたびに、自己嫌悪と自信喪失におちいり本気で逃げかえろうと思った毎日であった。そんな頃、家庭訪問がはじまった。生き生きと自信たっぷり自分の家や村の中を案内してくれる子どもたちと、慣れない道を歩いた。その時、この子たちは十年もこの村で生活してきたのだ。よそからきた新米教師

の私が、何も知らないのに先顔をして自分の思い通りにしようとしていたのだと気がついた。それからは、毎日毎日、ほんとうによく村を歩き遊びまわった。河原でダム作り、山でターザン「こっこ」等。そして、気がついたらいつの間にか、子どもと私とがびったりとよりそっていた。

困ったら子どもに教われというけれど、教師が本気で困った時にしか子どもから教わろうとは思わないのではないかとあの時の体験から思う。

それからもう一つ、一学期の終業式の日、胃いれんをおこしてしまった。宿直室で油汗をだして苦しんでいると校長先生が見えられ、「通知票だけは自分で渡せよ、渡せるな。」と言って、コップに水を入れて薬を持ってきて下さった。ひとりひとりに通知票を手わたした。嬉しそうに通知票をもらっていく子どもの顔を見ながら、

「やらなければならぬ時には、何をおいてもやらなければならぬ事がある」ということを教えていただいた。

新卒の学校で教えられたこの二つのことは、それ以後の教師生活の中で、何かにぶつかった時の判断の基になったと思う。

「そして今」
二十年目になり、好むと好まざるにかかわらず、責任ある立場に立たされるが多くなった。今まで、いやにならないうと心のどこかで思っていた甘えが、しつぱがえしとなって自分におちて

女教師研究大会参加者の声

西村尚子

「人間性豊かな児童生徒を育てるために私たちは、どのように研修したらよいか。」というテーマで上高井の女教師が一堂に会しての本年度の研究大会に参加し、短時間であっても内容の豊富な報告や発表がありました。

本味のわけてあげた心あたたまる交流に、異国での人の心ふるさとを愛する心はひとつという思いがしました。山岸先生からは、▽よくない先生とは▽女の人がどうなった時に地位が向上したといえるか▽あやまれることふたつ一、意味ありげに解釈すること。二、文字どおり適当な解釈すること。そして筋道を立ててものを言ひすぎると人間はつまらなくなる。しかし、立場だけでもいけない一、等、大変ユニークな見方で教師のあり方を示唆されました。私達は教育のプロとして、もっとずくをだして教材研究をし、子どもと共に学んでいきたいと思ひます。(高山小)

いることを痛感することがたびたびある。
一本筋の通った教育理論をもっていないこと、視野のせまき、組織の中での自分の在り方等、もう一度足元から見直す必要を感じている。
女教師の数が多くなり、教

来年度への要望

会員の反省から

◇研究発表会
期日・参加状況から
・できるだけ多くの会員が出席できるように、各種会合との調整ができないか。

・もっと大勢の人が聞けるように、職場への働きかけなど工夫したい。
・時間を正確にお願いしたい。

育界も女性をぬきにして考えられない時にきていると思ふ。
女性が増えたことが、教育界にとってプラスになるように、これから自分が何をしたいかなければならないのかを問ひ続けながら歩んでいきたい。(日滝小)

内容について

・同好会会員などで深い研究をなさっている先生もおられると思うから、そういう先生方からお話をしてもらうのもよくなるか。

・科学分野・哲学分野・芸能分野など、多種多様なお話をしたい。分野別というようないか。分野別というようないか。分野別というようないか。分野別というようないか。

編集後記

あけましておめでとうございます。今回は昨秋に行われました、第七回研究発表会、第六回女教師研究大会の特集として、一一号をお届けいたします。

研究発表会・女教師研究大会ともに、毎月の現場での貴重な教育実践・海外教育事情報告・専門分野での研究発表と大変バラエティーに富み、自己が問われたり、大変感銘させられたり、内容ある有意義な会でした。なお紙面の関係上、研究発表会の宮前日王先生(日野小)女教師研究大会の後藤悦子先生(日野小)の発表につきましては、会誌四十二号へ掲載させていただきます。

年の瀬のお忙しい中、ご寄稿くださった先生方、ありがとうございました。(田幸・業田)

子どもを見とる力をつけるために、仮説をもって取り組みたい。
・短時間の発表に終わってしまいが残念だった。研究会であるから話し合い等で深める時間がほしい。
・出品作品を前日までに把握でき、作品一覧表を当日に

まに合うよう作成したい。
・女子会員の作品を多くしたい。
会員の発表
・会場の座席配置を工夫して、スライド等、みやすくしていきたい。
・研究会であるので、話をきくだけでなく、話し合う(せめて質疑だけでも)時間をとってほしい。そのために、会員の発表を一名にしたらどうか。(以上、代議員会反省記録より)